

平成27年度 学校経営報告

都立青山高等学校長 小山 利一

平成27年度における都立青山高等学校の教育活動を次のようにまとめ、学校経営報告とする。

1 27年度の取組目標と方策

今年度の目標の主眼は、「中期目標実現の基盤づくり」の年と位置付ける。中央教育審議会の答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」（平成26年12月22日）を踏まえ、これからの高校教育に求められる教育内容や学習・指導方法について、本校として検討していく。また、5年後の新テスト「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」に対応する指導内容・方法を検討していく。

(1) 教育課程管理と学校運営

- ◎ 主幹教諭を核とした組織体制を確立させ、80周年に向けた基盤整備をするとともに、信頼される学校づくりに全教職員が取り組む。
- ① 8人の主幹教諭及び5人の指導教諭が学校経営を支え、課題解決の先頭に立って取り組んでいく。企画調整会議は、会議等の調整にとどまらず、学校の課題に対して具体的な提案を全校的な視野に立って検討する経営戦略会議的なものとする。
- ② 教科及び分掌、学年に主任を置くほか、副主任を置き、主任教諭を充てる。各種委員会には分掌や学年の副主任を充て、主任教諭の力を組織内で十分に発揮させる。指導教諭は、校内・外の教員への指導的な役割を果たすため、積極的に授業を公開する。
- ③ 「体罰は絶対にしない」ことを宣言する。また「いじめは絶対にしない。させない。許さない。」ことを宣言するとともに、スクールカウンセラーを活用した1年生への全員面接を実施する。
- ④ 机上整理「クリーンデスク」と施錠管理の徹底を図り、個人情報の適正な管理を徹底する。また、信頼される学校を目指し、サービス事故を起こさないために定期的に教職員への意識啓発研修を行い、サービス事故ゼロを継続する。
- ⑤ 経営企画室では、「経営参画ガイドライン」に基づき、積極的に経営参画を推進するが、あくまでも適正な事務運営が基本であるとした職務遂行を行う。特に「学校の最初の窓口」であることを自覚した丁寧な対応をこれまで以上に行う。また、自律経営推進予算の執行に当たっては、校長の予算編成指針に基づき、メリハリのある予算編成と適正な執行を行う。さらに、私費会計における計画・徴収・執行・精算の適正化を図り、立替払いのない予算執行を徹底する。
- ⑥ 地域との連携をこれまで以上に進めるとともに、学校公開や施設開放を計画的に実施する。

【成果と課題】

- ①成果：ア) 主幹教諭を中心に安定した学校運営が実現できた。企画調整会議では、特に三学期の授業時数の確保について、各分掌・学年からの意見を踏まえ、十分な協議が進み、一定の結論を導くことができた。
イ) 生徒の提案を踏まえ、いじめ・体罰等の個人調査について、秘密保持が保てる回収方法に改善した。また、スクールカウンセラーの1年生全員面接に基づき、直ぐに面談したい生徒への対応が素早くできた。
- ②課題：ア) 土曜日授業の拡大を企図した教育課程を編成したが、教育委員会を動かすことができず実施に至らなかった。本校では現在20回の土曜日授業と、8回の講習デーを実施している(原則、全員参加を義務付けている)が、土曜日授業の拡大を望む声が大い。進学実績を更の伸ばしていくためにも、土曜日授業を本格的に実施できるかが大きな課題である。

イ) 個人情報に係るサービス事故が1件起きた。1つの手間を惜しまない姿勢が事故の未然防止につながることを周知徹底した。

(2) 学習指導

- ◎ これからの学習の在り方を受動的なスタイルから能動的なスタイルに大きく変えていけるよう、アクティブ・ラーニングなどの手法の導入も含め、学習形態全体の見直しに取り組む。
- ① 「授業が第一」を徹底し、チャイムと同時に授業を始めるとともに、遅刻の防止、学習環境の整備など授業規律の更なる徹底を図る。また、週末課題を適切に与え、学習の定着を図る。
- ② 「年間授業計画」を5月までに作成し、生徒・保護者に配布・周知する。年間授業計画には各学年における到達目標(標準・発展)を明確に示し、月1回の教代会等で定期的に進捗状況を確認し調整を行う。また、生徒による授業評価(年2回実施)を活用し、授業の改善・工夫を行う。
- ③ 教員間の相互授業参観は必ず行う(6月、11月を授業参観月間として位置付ける)。若手教員を中心とした研修会を立ち上げ、指導力の向上に努める。
- ④ 1・2年生には主要教科に関して予習・復習を徹底させるとともに、各教科で連携を図り、週末課題を与えるなど、「学年+2時間」の家庭学習時間を確保させる指導を徹底する。
- ⑤ 読書活動を積極的に推進するとともに、都が主催する書評合戦(ビブリオバトル)に参加する。また、教科等においてディベートを積極的に導入する。さらに科学の甲子園東京都予選に出場する生徒を育成する。

- ①成果：ア) 授業への集中力は依然として高い。休み時間からの切り替えも十分できている。「チャイムとともに授業開始」も定着している。今後はさらに質の高い授業づくりが課題となる。
イ) 授業内容の工夫改善を図るための研修会へ参加する教員が増えた。特に、アクティブ・ラーニングについて様々な外部研修会等に積極的に参加し、授業に生かす教員が増えた。
ウ) 校内のビブリオバトルを一週間実施した。校内優勝者は都大会で優勝(全国大会では準優勝)した生徒に1票差で敗れた。校内2位の生徒は個別に参加した「全国高校ビブリオバトル2015」の関東甲信越大会で優勝し、全国大会に出場した。公民の授業ではディベートを実施し、生徒に主権者としての意識を高めた。科学の甲子園東京都大会に2年生選抜チームで参加。総合8位とこれまでの最高成績を収めた。
- ②課題：ア) 生徒による授業評価を生かした授業の改善が十分とは言えない。生徒に迎合するのではなく、生徒の「やる気」を喚起し、主体的に授業を受けたいと思わせる授業の工夫をすべての教員が行うことが課題である。
イ) 5人の指導教諭のほか、本校には多くの教科指導力の高い教員がいる。互いの授業を積極的に参観・協議する中で更に授業力が高まるものとする。こうしたことを実現させることができなかった。(若手の教員は積極的に実施している。)

(3) 進路指導

- ◎ 生徒に高い進路希望をもたせ、それを学校全体で支え、実現させる進路指導を行う。
- ① 進路部を中心として、進路全体計画に基づき、各学年が指導スケジュールを着実に実践していく。3年生は「第1志望を下げない」、2年生は「高い志望をもたせる」、1年生は「第1志望は(難関)国公立大学」を指導の柱とする。
- ② 模擬試験ごとに難関国公立大学志望者リストを作成し、受験日までの具体的な指導について道筋を付け、学年や教科に伝え指導に生かす。模擬試験の結果は、学年集会の場において各教科担当者の解説を加えて返却する。
- ③ 進路部は計画的に校内作成学力テストや外部模試を実施し、各学年の模試データを一括管理し、データ分析をし、学年に提供する。また3学年ケース会議及びセンター試験後の出願指導を行うための目線合わせを主催する。
- ④ 平日(土曜日も含む)及び長期休業日中には補習・講習を実施する。特に長期休業日中の講習に当たっては生徒が受講しやすいように同一講座を複数設置する(午前・午後、前期・後期)など、各教科は配慮した計画立案する。3年生向けには難関国公立大学を目標とした講座を設置し、1・2年生向けには習熟度に応じた講座

を設置する。

⑤ 3年生については、二学期末にセンターシミュレーションテストを実施するとともに、二学期末から1月末までの間はセンター試験及び二次試験対応の特別時間割を編成し、センター試験及び二次試験への対応を組織的に行う。

⑥ 外部模試や学力テスト、定期考査などの成績上位者を掲示するなど、生徒の頑張りを褒賞していく。

①成果：ア) 各学年がたてた指導目標に基づき進路指導ができた。その結果、3年生は国公立大学への出願が217名となり在籍生徒の77%に上った。高い志望を持ち続け、難関国公立大学への受験者は57名で昨年を10人上回った。

イ) シミュレーションテスト(12月実施)でのマークミスの分析を実施し、自己採点がどれだけ実際の点数と異なるかを生徒に示した。その意識付けが本番のマークミス、自己採点ミスを防ぎ、出願指導に生かした。

ウ) 進路部を中心とした進路指導体制、データの収集・結果分析、学年への指導や進路情報提供など、組織的な動きが機能できるようになった。

②課題：ア) 今年度の夏は、増学級に伴う増加集工事があり、校内で十分な講習・補習ができなかった。工事の騒音を避けるために、他校での講習や夜間に実施するなど教員が工夫しながら実施したことは称賛に値する。

イ) 教員が作成して実施する校内実力テストについて(1・2年生は三学期に実施)、三学期の授業日数の確保の観点で議論した。負担は大きいが教員の作問力を付けさせるために重要であり、今後も実施していくことになったが、三学期の入選絡みの休業日が多く、土曜授業の制限がなくなることがその改善策の1つとなると考えている。

(4) 生活指導

◎ 生徒部の指導方針に沿って、全教職員が一致して取り組む組織的な生活指導を行う。

① 「青高生としての矜持」を持たせる指導を徹底する。「自由と自律」について、生徒が十分に理解し、適切な行動が取れるように指導するとともに、時間の厳守や身だしなみ、あいさつなど、社会の一員としてのマナーや態度、行動がとれるよう指導する。今年度も引き続き、「遅刻指導」を全教職員が一致して取り組んでいく。

② 「時間の管理」と「節電」を徹底し、学校生活にメリハリを付けられる生徒を育成する。夏冬の電力状況を踏まえ、積極的に節電する意識をもたせ、実践できるよう指導する。

①成果：ア) 「自由」の背景には「責任」が伴うことについての意識は高まってきた。青山高校を大事にしようとする生徒が多く、積極的に学校生活を送っている。

イ) 遅刻者が大幅に減少した。各学年で遅刻についての指導が徹底してきたことがこの結果をもたらしている。前年度からの比較は、1年生：467回⇒414回(8クラス)、2年生：1053回⇒771回、3年生：1446回⇒783回、となっている。ただし、これで満足することなく、0分から5分までの遅刻者が無くなることで、授業にも好影響が出てくるものとする。

②課題：ア) すべての生徒がTPOをわきまえ、気持ちの良い集団生活を送ることができることが究極の目標である。

イ) 不在にする際の消灯など、細かなことの積み重ねが節電になるここの意識付けが十分でなかった。

ウ) 昼の外出について、届け出制で許可しているが面倒がる生徒がいて徹底できていない面がある。教員の声掛けなど小さな一言の継続が生徒の意識を変えることができる。

(5) 特別活動・部活動

◎ 部活動や体育活動を通じて体力向上に努め、長い受験期間を乗り切る基盤をつくる。

◎ 公職選挙法改正で選挙権が18歳に引き下げられる中、主権者としての意識と実践力を培う。

① 各部の顧問は「部活動を通して人間教育を推進する」という校長の方針の下に、各部の年間指導方針を立てるとともに、指導に当たっては体罰等不適切な指導は絶対に行わない。

② 部活動や学校行事の意義を考えさせ、生徒が目標に向かって活動する支援を積極的に行う。顧問や担任は、生

徒の進路希望に沿ってその実現のために、「時間の管理」を徹底するとともに、生活の切り替えを十分できるように指導する。また部活動終了後の自習室での自学学習を促す。

- ③ 始業式や終業式を始め学校行事等においては校歌を全員で歌い、学校としての一体感や学校に対する誇り、愛着をもてる生徒を育てる。
- ④ ホームルーム活動や委員会活動、部活動などを通して、人権尊重の意識を育てるとともに、自治的意識を培い、主権者としての行動がとれるよう指導する。また、「いじめはどの学校、どの学級にも起こり得る」との認識に立ち、いじめのない学校づくりに努める。

①成果：ア) 部活動の加入状況は 96.3%(5月1日現在)であり、多くの生徒が部活等に積極的に取り組んだ。

イ) 体育祭や外苑祭等の学校行事にも積極的にかかわる生徒が多く、特別活動の目標に合致した指導が行われた。外苑祭は、昨年度 7 千人を超えたが、今年度は一気に 1 千人以上増加し、8 千 2 百人の来場者があった。演劇を見られない来場者への対応が今後の課題でもある。

ウ) 主権者教育について、教科指導における位置付け、ホームルーム活動における位置付け、指導方法について委員会を設置して検討した。生徒への啓発として、始業式や終業式等における校長式辞で取り上げた。SNS 東京ルールに基づき、SNS 青高ルールを生徒会に検討させ、3月25日の修了式で全生徒に伝えた。

エ) いじめについて、アンケート調査に基づき、小さな点も見逃さず適切な指導を行い未然防止ができた。

オ) 卒業式では卒業生が校歌を大きな声で歌えるまでになった。また今年度は「蛍の光」のほかに、「揚げば尊し」を次第に入れた。大変素晴らしい斉唱であった。

②課題：ア) 週 2 回まで午後 5 時 30 分までの活動を許可しているが、自習で居残っているのか、部活動を終えてまだ帰らないのかなど下校指導に課題を残した。延長の部活動の下校指導は顧問教諭が行うことを徹底できなかった。

イ) 部活動を言い訳にして補習等に出席しない、学習が疎かになる、生活習慣が確立されないなどの弊害が出てきている。「学習を基盤とした上での、部活動や学校行事であること」を更に徹底していく。

(6) 保健・安全指導

◎ 校内美化を徹底する。今年度は、特に昇降口、更衣室に重点をおく。

① スクールカウンセラーを保健厚生部に所属させ、生徒や保護者の相談に対応するとともに、教職員へのコンサルテーションを積極的に行う。また 1 年生には入学当初に全員面接を行う。

② 校内美化を推進するために、全校を挙げて清掃を徹底する。また引き続きゴミの持ち帰りを徹底する。

③ 宿泊防災訓練を 3 月に実施し、救急救命講習を中心に自助と共助の具体的な方法を学ばせる。その他、防災訓練やセーフティ教室等を実施することで、災害や事故に遭遇した際の危機対応能力や危機管理能力を育成する。

④ 保護者や家庭科等各教科と連携を図りながら食育を推進するとともに、保健室通信を発行し、成長期にある高校生にとって必要な食事の在り方や栄養の摂取方法などの啓発・支援を行う。

⑤ 特別支援教育推進コーディネーターを中心とした組織的な校内体制を確立し、校内研修会を行うなど発達障害等の理解を深め、適切な支援を行う。

①成果：ア) スクールカウンセラーの活用により生徒や保護者、教員の心の安定が保たれ、大きな事故を起こすことなく 1 年間を終えることができた。カウンセラーと面談することで、一定程度気持ちを整理することができ、次へのステップを踏めた生徒が多く、3 年生では目標を達成し新たな進路に向かっていくことができた。

イ) 美化委員や保健委員を中心として、清掃指導、健康診断が円滑に行えた。健康診断の方法などについて保健厚生部から新たな提案(教員のより積極的なかわり)があり、次年度から実施することに決定した。

ウ) 宿泊防災訓練は、渋谷区や渋谷消防署、渋谷消防団、原宿警察署、東京防災救急協会な

どと連携し、新しい取組も加わりより充実したものとなった。

②課題：ア) 構造上、外部の砂埃が校舎内に入ってくるので、1階の廊下や昇降口を常にきれいにしておく必要があるが、十分に対応できなかった。次年度に向け、その対策のための予算措置をした。美化委員や部活動の生徒を活用しながら、よりきれいな校舎、学校環境を整えていくことが必要である。

イ) 特別支援学校との連携を行うことができなかった。青山特別支援学校が開校したこともあり、連携を進めていくことが課題である。

(7) 広報・募集活動

◎ 積極的に青高の良さを発信していく広報活動を行う。

① 塾や中学校からの学校説明会の依頼には積極的に応じ、学校紹介ビデオやパワーポイント等を活用するなどして本校の良さを発信する。出張授業について積極的に旧2学区の中学校や地教委に案内し、本校の教育を広報していく。

② 7月末から10月末まで教室の改修工事が入るため、夏の広報活動を工夫するなど、中学生の期待に沿う取組を行う（サマースクール、学校見学会、小学生保護者対象学校説明会など）。

③ 近隣の中学校と連携した広報活動を行う（中学校の学校説明会に本校が参加し、中学校の先の高校の状況を小学生の保護者に知ってもらう機会を作る）。

①成果：ア) 学校説明会への参加者が昨年より増加した。また夏の学校見学会などは造改修工事のため、色々制限があったものの、午後6時から開催するなど工夫をしながら実施し、昨年以上の参加者があった。

イ) 今年度も小学生保護者対象の学校説明会を開催した。昨年以上の参加者を集めた。

ウ) 港区立青山中学校の学校説明会に参加し、都立高校の説明をする時間をもらい、公立中学校の先の都立高校がどのような教育活動をしているのかを広報する場をもてた。

エ) 広報活動には多くの先生方が関わり、青高をより盛り上げていった。

②課題：ア) 猛暑の期間、冷房がまったく効かず、参加した中学生や保護者から批判を受けた。今夏の猛暑に機械が対応しきれなかったことが原因で、学校としてはどうすることもできなかった。後援会から業務用の大型扇風機をレンタルしていたが、「焼け石に水」状態だった。

2 今年度の数値目標 (学年280名を指標として) ※27年度卒業生283名

	目 標	今年度数値目標	27年度実績
1	難関国立大・国公立医大現役合格者	15名以上	22名
2	難関国立大学(旧帝大含む)現役合格者	20名以上	26名
3	国公立大学現役合格者	110名以上	103名
4	難関私立大学(早慶上理)現役合格者	実数90名 (延べ120名)以上	110名(140名)
5	センター試験の6教科17科目の平均点合計と全国平均合計の比較	245点上回る	246.5点
6	学校説明会参加者(年3回)	2,000名以上	2,236名
7	ホームページへのアクセス数	22,500回以上/月	28,542回/月

【参考資料】ベネッセ模試における「国語・数学・英語」総合の平均点偏差値の年度別推移

	高1・7月模試	高1・11月模試	高2・7月模試	高2・11月模試	難関国立大合格者数	旧帝大合格者	国公立大合格者
1年生	66.1	66.1					
2年生	66.0	64.9	61.2	62.3			
3年生	65.8	66.3	61.9	62.9	22人	26人	103人
27年3月卒業生	64.6	64.8	62.6	62.2	15人	18人	108人
26年3月卒業生	65.2	63.7	62.3	61.7	17人	27人	95人
25年3月卒業生	63.4	62.5	59.7	59.4	6人	13人	56人
24年3月卒業生	62.7	63.3	60.7	57.8	8人	15人	61人
23年3月卒業生	62.4	62.4	60.0	58.0	6人	7人	66人
22年3月卒業生	65.3	63.7	60.8	58.6	8人	9人	51人

※現在の在校生の成績は、今春の卒業生と同程度の成績を収めている。これまでの指導経過及び今年度の取組によって、上記の数値目標が期待できる。

3 全体としての成果と課題

(1) 今年度の最大の課題は、「中期目標実現の基盤づくり」としたが、そのためにも、2年連続で進学指導重点校の選定基準である難関国公立大学に15人以上合格者を出した実績を継続できるかであった。3年生(68期生)を校長は「確定の学年」と命名、何事にも3年続けられたら、それは実績として定着したことになるとの考えからであった。本校は、24年度に新たな指定に当たって、基準を満たしていないことから5年間の指定を外された。そして在校生への配慮から暫定措置として2年間の指定に留まった。その間は学校説明会等で「進学指導重点校としての募集をしてはならない」と教育委員会からの指示により、非常につらく厳しい時期を過ごした経験がある。再び同じ思いはしないとの決意で生徒や教員に臨んだ。今年の結果が今後の本校の方向性を決めるとともに、6年間の校長としての改革の正否を占うものであると考えていた。

その結果、上記に示すように難関国公立大学に22名の合格者を出すとともに、2年連続で国公立大学に3桁の合格者を出すことができた。この学年は、ちょうど進学指導重点校として募集できなかった最初の年で、「もし結果が出なかったら、進学指導重点校はどうなるのでしょうか?」という質問を学校説明会等で多く浴びせられた学年でもある。そうしたなか、入学してきた生徒がこうした成果を出したことは評価に値する。

68期生の入学と共に進路主任を交代し、より組織的な進路指導体制を築こうとした時期であった。新進路主任のきめ細かなデータに基づく進路資料を活用しつつ、新たに取り入れた模試結果の学年集会での返却・解説指導はこの学年から継続して実施してきた。当初は受け入れを渋っていたが、「まずは1回やってみよう」ということで実施した学年集会で好感触を得て、継続してきている。各教科担任が学年全体に対して統一した解説・指導ができるため、これまでホームルーム担任が返却した方法より数倍も効果は現れた。教科担任は模試分析をして解説しなければならず、これまでより負担は大きくはなしたが、教員にとっても教科の力量形成につながった。

3年生の学習への姿勢は、それを見る1・2年生にも大きな影響を与えている。あの先輩が頑張ったのだから自分も続こうと学習に向かう生徒が多くなり、好循環を与えている。この連鎖で本校は上昇していつている。これをいかに継続させていくかが課題でもある。少しでも気を抜けば、いつでも転落する危機にある。あのつらい時期を共有し乗り越えた教員がいかに新しく着任する教員に継承していけるかが重要である。

(2) 本校の進学実績は募集活動にも大きな影響を与えている。他の進学指導重点校と比べ、大手学習塾などの偏差値やランク付けでは7番目に位置しているが、入学後の伸長は大きいと自負している。そうした結果を見たり、学校説明会や学校公開などで本校を訪れたりする中で、本校を志望する中

学生が多くなってきたものと思われる。また適度な「自由さ」や「自由な雰囲気」は他校とは異なる点で、それは現在機能している。今後は、更に募集活動を積極的に行うとともに、生徒が明るくのびやかに学校生活を送るとともに、節度ある言動ができるように指導をしていくことが求められる。

今年度の受検状況を以下にまとめる。

【中進対調査】

男子定員：145人 第1志望 312人(2.30倍) 都立高1位

女子定員：132人 第1志望 327人(2.48倍) 都立高2位

【推薦選抜】

男子定員：14人 応募人数 101人(7.21倍) 都立高1位

女子定員：13人 応募人数 125人(9.62倍) 都立高1位

【学力検査】

男子定員：131人 最終応募者 318人(2.43倍) 実受検者 280人(2.14倍) 都立高2位

女子定員：119人 最終応募者 279人(2.34倍) 実受検者 251人(2.11倍) 都立高3位

男女とも、実質倍率が2倍を超えるという結果であり、学校としては大変嬉しく思っている。ただ、競争だから仕方ないと分かりつつ、受検者の半数以上が不合格だったことは忍びなかった。こうした状況で合格し入学してくる生徒には、本校を志望しながら残念ながら不合格になった半数以上の人たちの思いも背負って、これから始まる本校での生活を送ってほしいと希望している(新入生招集日に話をした)。

- (3) 校長としての6年間を終えた。今は充実した気持ちでいっぱいである。進学指導重点校をいかに継続させていけるかが最大の課題であった。外部の仕事はほぼ断って校内体制の整備に努めてきた。現在、管理職を支える8人の主幹教諭は最高のメンバーである。教科指導力のある5人の指導教諭をはじめ、主任教諭、教諭、実習助手、非常勤教員、経営企画室職員など本校にかかわるすべての教職員が校長の思いをしっかりと受け止めて職務を遂行してくれたことに、本当に感謝している。こうした姿勢こそが、現在の青山高校の発展を支えてきたものである。

4年後の80周年に向けて大きな目標を立てた。その目標に向かって青山高校にかかわるすべての方々の力を結集してほしい。